大正・昭和初期の粟崎遊園にみる娯楽と身体表象
―『北國新聞』記事を中心とした分析―

Leisure Issues and Physical representation in the End of the Taisho Era
－ Focusing on the Awagasaki Park, Ishikawa Pref. －

井　上　好　人
Yoshito INOUE

〈要旨〉

粟崎遊園は，1925（大正14）年，「北陸の材木王」といわれた平澤嘉太郎が石川県河北郡内灘町向粟崎の砂丘地に私財を投じて作った大遊園地である。浅野川電気鉄道の社長でもあった平澤が，同電鉄の姉妹事業として「宝塚にも劣らぬ　粟ケ崎遊園地」の構想のもと造られた。

こうした「郊外」のレジャーランドという新しい社会空間が，北陸地方で初めて受容され一世を風靡した背景に，人々の娯楽文化や身体表象のどのような芽生えや変化があるのだろうか。当時の「衛生」･「健康」の言説流布との関係を探るべく，オピニオン・リーダーとしての北国新聞社のスタンスを中心に考察し，あわせて高等女学校の遠足記録から，学校の遊園利用の実態にも言及した。大正後期から，娯楽や風俗をターゲットにした生活改善運動が，地方においてどのような文化運動・流行としてその裾野を広げていったのかを垣間見ることができるだろう。

〈キーワード〉
身体表象，メディア戦略，娯楽，衛生と健康，海水浴

1　はじめに

粟崎遊園とは，1925（大正14）年７月19日，「北陸の材木王」といわれた平澤嘉太郎が石川県河北郡内灘町向粟崎の砂丘地に私財を投じて作った大遊園地のことである。「北陸の宝塚」とも称された同園は，浅野川電気鉄道（大正13年設立，同14年５月10日より開通）の社長でもあった平澤が，同電鉄の姉妹事業として「宝塚にも劣らぬ　粟ケ崎遊園地」（1925年５月12日『北國新聞』）の構想のもと造られ，大盛況を呈した。海水浴場に臨んだ同遊園は，温泉場を中心にコドモの国，余興場，貸室，貸別荘，旅館，売店，飲食店，大体育競技場，相撲場，野球場，庭球場，競馬場などが付設されていた。（1941（昭和16）年に閉園となる。）

この遊園が県内の人々に好意を持って迎えられ，新しい娯楽空間として定着していった要因は何だろうか。

『内灘町史』には，同遊園の活況について次のような解説がある。「余興場の舞台では芝居･歌劇などが上演された。土用の「丑の日」は夜通し開場し，白鳥の池から松林公園一帯は「電飾」を施し電車も終夜運転で賑わった。秋には会社・工場などが運動会・慰安会などに団体で予約するものが多かった。錦華紡績工場の千八百名，金沢専売局の千名，金沢鉄工組合の七百名などの大口利用があった。ただし冬は休園し，三月中旬ころから開園した。」（『内灘町史』470-471頁）

明治～大正期における地方の鉄道が郊外の温泉行楽地にむけて敷設されていったことは周知のとおりである。石川県では山中温泉と山中馬車鉄道の関係がそうである。1898（明治31）年に設立された同鉄道（翌年に山中－荒木間の開通）は，大正２年には県内で初めて電化開通（山中－大聖寺間）されている。しかし，粟崎遊園と浅野川電気鉄道との関係は，従来の温泉地－鉄道のケースとは，その意味合いが随分異なるのではないか。

金沢市の郊外に位置する内灘の海岸は，隣接する金石と並んで市内から「遠足」で日帰りの距離であった。浅野川電気鉄道の運行によりアクセスの利便性を向上させて開園した同遊園は，確かに海水浴場との相乗効果を期待されてはいたが，風呂に入り食事に演芸鑑賞もできる，また，団体でも子供連れの家族でも，誰もがそれぞれに楽しみを味わえる閉じた空間としてのレジャーランドであった[(1)]。吉見（1990）の言を借りれば，そこは「郊外」という歴史的な記憶からは切断されメディアに媒介された新しい社会

空間の誕生であったということになる。（【資料】の粟崎遊園のポスターに表象されるイメージからも推察することができる。）

このタイプの遊園地が受容された背景に，人々の娯楽文化や身体表象のどのような芽生えや変化があるのだろうか。当時の「衛生」・「健康」の言説流布とどのような関係があるだろうか。また，オピニオン・リーダーとしての地元新聞社は，同遊園の話題づくりにどのようなスタンスで臨んだのだろうか。

先行研究は，鉄道事業に遊園地，温泉，そして海水浴を組み合わせて集客を狙う戦略として，小林一三の阪急電鉄（1907年設立，箕面有馬電気軌道）と宝塚や，南海鉄道と大阪市南部地域の海水浴場などをあげ，関西の私鉄経営者たちの思惑と戦略について分析している。竹村（1996）は，彼ら私鉄経営者たちが経営の安定を求めて新しい産業として沿線のリゾート開発に手を染めていったことを明らかにし，こうした事業戦略に欲望を刺激され，レジャーランドに足を運ぶことに嬉々として受け入れていった大衆のメンタリティについては，鹿島（1999）が，そもそも日本人には余暇を子供や家族と共に過ごし行動する習慣があったことを指摘している。

当時の新聞はこのような私鉄事業者の戦略を批判し，同時にこの種の誘惑に乗せられる大衆を揶揄していたが[(2)]，粟崎遊園の創設者である平澤嘉太郎は，小林の宝塚に憧れこれをモデルにしたことはよく知られている。いわゆる宝塚モデルは，そのあり方を巡ってさまざまな論議を呼び批判もされてきたけれども，関西から関東，北陸地方へと模倣されていき，大衆の娯楽を水路づけし組織化していったのである[(3)]。

小論は，大正末期の粟崎遊園開業前後の『北國新聞』記事を題材に，「身体」をめぐる様々な言説が発せられ構成されていく過程や背景を，中央→地方の言説の伝播・浸透の過程と単純に捉えるのではなく，北陸地域の政治経済，階層的なハビトゥスのせめぎ合いといった地域に特徴的な問題から捉え直し，このような新しい歓楽空間を人々はどのように意識し意味づけしてきたのか，という視点から分析を加えたい。特に，第四高等学校をはじめ中・高等教育機関が集まり，学生・女学生の話題も多かった金沢の街にあって，学生たちがこの施設にどのような態度をとったのかについても言及してみたい。地方でも次第に意識されるようになった中産階級的なライフスタイルへの彼らの同調／非同調という観点からも，当時の文化政策のあり方について検討を加えたい。

なお，北國新聞社は，1893（明治26）年８月５日創刊（社長兼主筆：赤羽萬次郎）の石川県を中心とする地方新聞社である。大正末期から経営拡大し，文化事業やスポーツイベントに力を入れるようになり，映画，ラジオといった新しいメディアも利用して読者サービスを提供した。1954（昭和29）年の時点では，石川県で新聞購読者に占める同紙比率が80％を超えるようになっていた。

【資料】粟崎遊園のポスター（『風と砂の館』所蔵）

2　粟崎遊園の開業と北國新聞社の対応

粟崎遊園の開業は，1925（大正14）年７月19日であった。同遊園の開業は，地元ではどのように受けとめられたのだろうか。また，オピニオン・リーダーとして『北國新聞』は，どのように関わったのだろうか。

開業をひかえた５月12日，『北國新聞』は，「十九日から開場の粟ケ崎遊園　十八日に花々しい開場式　人気を呼ぶ芸妓の手踊」と題した記事を掲載した。それによれば，「園内には温泉場あり余興場あり海水浴場ありコドモノクニあり，その他貸席，料理屋，別荘，食堂，売店など四十餘の建物が立並び大体育館，野球場，庭球場，角力場など体育方面の設備も整ひやがては植物園，動物園も作られる計畫であつて大規模の競馬場も設けられる筈である」と。ハイカラな洋風建築の粋を凝らした建物内にある施設の呼び物として，まず，温泉場の浴室は「華麗なる美術繪焼附の総タイル張り」で，浴槽の高さ２ｍの上から湯の滝が落下しているというもので，そして「子供の国」では長さ三十五間（約65ｍ）の「大山滑り」が，「日本一の大仕掛けなもの」として宣伝された。

いよいよオープンをひかえたその前日，７月18日に開園披露会と祝賀の宴が施設内の「大会堂」で催された。『北國新聞』７月14日記事の報じるところによれば，来賓として，県知事をはじめ，内務部長，市長代理，運輸課長，教育課長，郵便局長，医大学長，市会議長，各県立学校長，辰村米吉，本多政樹，中宮茂吉などの名士が詰めかけた。知事は，祝辞の中で平澤嘉太郎の計画を賞賛し，「県民がこの美園を利用せんことを希望する」ことを述べた。舞台余興として佐野吉之助の主宰する金沢能楽会による加賀宝生の能楽があった。来賓者たちの初入浴のあと，本館階上に移り，金沢市内４つの遊廓から参じた芸妓連も交じり宴が催された。「盛會萬歳裡に散會」したのは午後七時過ぎ

であった。

このように同園は，県の政財界から教育関係者までの重鎮が顔を揃え，衆人が注目する中で，華々しいオープニングを飾ったのである。また次に示すように，開園当初から催し物も実に多様で，芸妓連を集めた伝統的な遊楽から，大衆演劇，そして科学技術を凝らした乗り物まで，およそ世の人の慰みと好奇心を満足させるあらゆる要素を混ぜ込み，歓心を買わせる仕掛けをとっていたのである。

すなわち開業日から十日間，「余興場」では「毎日午前十時から東西北及び主計町芸妓の手踊り」が催され，温泉場から海水浴場までは「日本で最初の軌道式自動車が往復する事」で，海水浴客の足の便にも留意されていた。開業からおよそ１ヶ月経った８月９日の『北國新聞』では，「連日大人気の粟崎遊園　軌道自動車動く　飛行艇も飛ぶ」との見出しでその盛況ぶりが次のように報じられている。

粟崎遊園は，その後日を追ふに従つて設備が整頓し殊に目下開演中である餘興の喜笑劇が人気を呼んで連日の素晴らしい景気である。遊園地から海水浴場までの軌道自動車は愈九日から開通する事になつたが濱茶屋の入場者に限つて無料で乗れるそうだから一般に歓迎されて居る。これと相前後して廿五人乗の大型乗合水上飛行機もいよいよ動きだし新海水浴場を基点として海上の涼風に迎へられ毎日数十回粟崎金石間を百万馬力で往復することになり総てが漸く本調子になつてきた。（注：下線は引用者による。）

「乗合水上飛行機」は，例えば1922（大正11）年の平和紀念東京博覧会（３月10日から７月31日まで，東京上野の不忍池で開催）において池を走る水上飛行機として人気を博していた新奇な乗り物であった。これが，内灘と金石の両海水浴場を結ぶ連絡船として北陸にも登場したのである。

北國新聞社は，単に報道のみで同園に対応しようとしていたのだろうか。実は，自社の「婦人見学団」による「ピクニック」を企画し，その運営に携わっているのである。開業後３日経った大正14年７月22日，は「北國婦人ピクニック　粟ケ崎遊園地を中心として」という企画記事がそうである。

河北潟湖畔景勝の地を選んで「北陸の宝塚」たらしめんと工事中であつた「粟ケ崎遊園地」はこの程愈々竣成した，本社及本社婦人社会見学団主催の下に視察を兼ね同遊園地を中心に一日のピクニックを催ほし入浴に，散策に，餘興に，講演に左の規定の下に白砂青松の地に白日を浴びて一日の清遊を試み度いと思ひます。

これによれば，主催は北國新聞社・本社婦人社会見学団で，定員200名，実施日は，７月28日，午前10時に浅の川電鉄七ツ屋停留所に集合するというものであった。「会費不要，中食，電車賃，入場料，土産等本社負担」という利用者には好条件の企画であり，申込方法は「住所氏名明記の上二銭切手封入本社事業部宛」に申し込むというものだった。現地では，第一高等女学校校長　松宮助之丞氏の「金沢地方の言葉について」という講演もあり，余興として，筑前琵琶，長唄，常磐津などが企画されていた。

記事に見られる「婦人社会見学団」とは，当時，新聞社内に併設されていた文化啓蒙活動の団体であると思われる。同団体についての北國新聞社側の詳しい資料はないが，同様な名称をもつ団体として，大阪毎日新聞社の「婦人社会見学団」がある。これは，大毎の事業部長であった橋詰良一（せみ郎）によって，大正５年に組織されたもので，北國新聞社もこれに倣ったものであると考えられる。

また，同社の「ピクニック」企画は，1920年代前後からのピクニックやハイキングのブームを反映しているだろう。行政のほうでも郊外型公園の整備が図られるようになり，1917（大正６）年の井の頭恩恵公園（東京都武蔵野市と三鷹市）を端緒にして，都市政策・健康行政の一環として，市民の健康と休養が奨励されるようになっていた。これが昭和期に入れば，例えば，武蔵野電車（現：西武鉄道）が青梅線沿線にハイキングコースを作って盛んに割引を行うなど健康ブームに乗ったキャンペーンが大々的に行われるようになるのである

さらに，北國新聞社では自社の従業員の慰安会として粟崎遊園を利用している。大正14年９月25日『北國新聞』記事「本社印刷部慰安會　百五十餘の慰楽　一昨日粟崎遊園で」でみることができる。

朝来の一雨も名残なく晴れて秋風が和かく海面を渡る。一昨日本社工場部員と其の家族たちのためにと粟ケ崎の新開地へ一日の慰安清遊を試みた。総勢無量百五十餘名の多勢が三々伍々浅野川電鉄に運ばれて會場なる遊園地へ。集まつたのは午前十時頃，清水を貯えた湛えた大浴場に心行くばかり浸つて遠来の汗を流してのち或は子供の國にと思ひ～～の行楽を擅にし軈て正午西尾主事の斡旋に依つて本館前の別荘大広間に一同陣取り席定まるや山田部長の簡単なる挨拶あつて開宴となり互に□□数番水入らずの餘興漸く滞り談論風發，さては部員若手の隠し芸など続出して一同の□を解かせた。其の内本館内演藝場では特に本社のために選ばれた座附一派の『重の井子別れの場』を上演して一同をホロリとさせ次で松旭齋天旭一派の奇術あつて観者の手に汗を握らせるなど折柄仲秋の暑からず寒からざるの彼岸日和と共に一同時の移

るを知らず。斯て薄紅ゐの陽が砂丘の彼方に没する頃家族打揃つて思ひ思ひの帰途につき茲に意義ある歓楽の一日は夢と暮れた。尚ほ此の慰安會に際し何くれとなく斡旋盡力せられた平澤場長及び西尾主事その他の諸氏に対し深甚なる謝意を表する次第である。

注：□の箇所は判読不能の字を表す。

注：「重の井子別れの場」とは近松門左衛門原作「恋女房染分手綱　重の井子別れの場」。「松旭齋天旭」とあるのは明治末期から昭和期にかけて活躍した女性奇術師・松旭斎天勝（1886-1944）の誤植ではないかと思われる。

このように，温泉を中心とした余興場（演芸場）の施設，各種の野外施設の利用促進が，北國新聞社自らが社内活動の一環として率先して行っていたことがわかる。それは，粟崎の海岸が海水浴リゾートとしての立地に恵まれていたこともちろんあろうが，スポーツやピクニック，海水浴などへの関心が大衆レベルにも高まっていたことがその社会的背景として大きかったことも窺える。

では，健康で強靭な身体への関心が，新聞社の経営戦略としてどのように利用されたのだろうか。次節でみてみよう。

3　娯楽としてのスポーツ・イベント

スポーツの大衆化と健康ブームは，次の２つの側面から推進されていったと考えられる。

第一は，文部省の施策である。国民の健康増進と健全思想の育成をめざし，まず，1922（大正11）年の「運動体育展」では，体育とスポーツの啓蒙普及のために各地方都市を展示，実演，講演，映画などの方法で巡回された。1924（大正13）年の「全国体育デー」（11月３日）の制定を経て，1926（大正15）年３月，「体育運動振興ニ関する件（訓令）」が「健全なる国民体育の普及発達」をめざして発せられる。

このような政策的な後押しと前後しながら，石川県のように，大正７年から10年にかけて「石川県青年体育大会」が開催されていた記録が残っている。県師範学校を会場とした同大会は，各郡市対抗の形式をとり，県教育委員会のほか，第九師団も協力していた。このようなさまざまな組織や団体が関与したイベントの実績は，大正14年の石川県体育協会の設立となって結実している。

第二に，新聞社の果たした役割である。それまで，学生の自治会（「校友会」など）が対抗戦という形で対外試合を行ってきたのが，新聞社が斡旋役として仲介することにより組織化されたリーグ戦方式へとシフトしていくのである。スポーツや運動が新聞社の販売拡大のための重要なターゲットとされるようになってきたのである。野球の場合，大阪朝日新聞社が全国中等学校優勝野球大会を主催するようになるのは，1915（大正４）年であり（甲子園球場に移るのは1924（大正13）年），大阪毎日新聞社が選抜中等野球大会を主催するのは1924（大正13）年である。例えば，新聞編集部門に「運動課」が独立して設けられるのは，大阪毎日新聞の場合，1925（大正14）年であり，各種の学生スポーツ・イベントを主催するようになった。

そして，新聞社が関与するスポーツ・イベントに，新しい大衆娯楽の事業者が絡んでくる。実は，朝日新聞社が全国中等学校優勝野球大会を主催するようになったのは，阪急の小林一三が企画提案をしたことが発端であり，彼が「豊中グランド」を提供したからである。野球に大衆娯楽としての可能性を見出した小林は，その後，1924（大正13）年，「宝塚運動協会」を結成し，途中解散を経て，1936（昭和11）の大阪阪急野球協会」（後の阪急ブレーブス）の設立となって花開いていくのである。

小林は，次のように自らの事業における球団経営の位置づけを語っている。「グラウンドを持つ鉄道会社，たとえば東京ならば，京成電車，東横電車，関西ならば，阪神の甲子園，阪急の宝塚，京阪の寝屋川，大阪鉄道の何とかいうグラウンド等立派な野球場を持つ是等の鉄道会社が各会社専属のグラウンドにて，毎年春秋二期にリーグ戦を決行する，そうして優勝旗の競争をする，斯くすることによって各電鉄会社は相当の乗客収入と入場料と得るのであるから，野球団の経営費を支出し得て，或は余剰があるかもしれない。」（小林一三「職業野球団打診」『私の行き方』（1935），斗南書院。）

粟崎遊園でも，1927（昭和２）年から２年間，全国中等学校野球大会が開かれたが，それは，阪急電鉄による全国中等学校野球大会の成功をヒントにしたものだった。

阪急が客集めのため豊中で野球大会をやり，その後，名古屋でもやった。それなら，粟崎でもやれないわけがない―というので，企画したように思う。入場料をとらずに客集めをした。その分を電車でもうけた。三年と続かなかったが，二年間続いた。なんでも米子中の強かったことが印象に残っている。」（松本金太郎の回顧。高室信一「昭和ロマン物語　粟崎遊園」『粟崎遊園物語』，56頁。）

「三年と続かなかった」とは，粟崎遊園のような余暇空間が学生スポーツとは相容れなかった何かがあったことを匂わせているかもしれない。

ところで，こうしたスポーツの大衆化と娯楽事業化は，男性だけがそのターゲットとなったのではなく，女性の間にも運動と健康のブームが湧き起こってくるのだが，この点について次節でみてみよう。

4　海水浴への誘い～婦人と運動～

大正後期は，文学テキストや広告媒体の中で，理想的な女性の肉体美が浜辺のイメージの中で語られ，また，逆に，海辺のイメージがそういう女性の肉体モデルによって構成されるようになる時代である。

雑誌『婦人界』（大正14年８月号）では，「山と海へのお支度」という特集記事で，「夏は心身鍛練の時」，「海水浴と海気浴」，「登山に就ての注意」，「海水着とケープ」と題した特集が掲載されている。こうした女性の健康ブームに便乗する形で，女子スポーツのイベントとしての「全国女子中等学校庭球大会」は，1925（大正14）大毎の主催によって開かれるようになった。

女学校で「体育」の授業として水泳や海水浴が行われ，海辺で日光を浴びることが「健康」を得るための科学的に立証された方法であるとの言説も流れるようになった。

では，粟崎遊園の開園年（1925年）の『北國新聞』は，女性の「体育」や「健康」をどのようなイメージの中に捉え，どのような記事として描いてきたのだろうか。当時の記事からは，運動やスポーツに親しむ女性をテーマにしたものが増え，県民がこのようなテーマに対して関心を寄せるようになってきたことが窺える。

大正14年７月５日の記事では，同年の女性運動界を振り返り，その盛り上がりの少なかったことが嘆かれている。

春のシーズン終る　淋しき中にも寂しい婦人運動界
女子に至つては未だ誤られたる女性美と，誤られたる体育思想に阻まれて何の見るべきなきは何といふ時潮の流れ遅き土地ではなからうか。

北國新聞社が女性運動界の低調を嘆く理由は，同社が女子体育振興に一役買っていたからである。大阪毎日新聞社に倣って石川県版の「女子中等学校庭球大会」を主催しているのである。大正14年９月25日『北國新聞』記事をみてみよう。

第二回女子中等学校庭球大會
そのむかし，釈迦や孔子を生んでくれた女性は，今も相変らず凡ての人間を産む―男も女も女性から生れて来る，然も遺伝の法則においては『健康なる女性が健康なる男女を生む』ことを鉄条とし人類健康の鍵を握るものが女性であることを認めてゐる。然も健全なる精神は健康なる身体に宿るべき約束において民族が将来の健否は現代の女性の健否によつて暗示される。故に社會は，より◇全なる次代の母を求め女性の知的教養と併行して婦人体位の増進に積極的の努力を拂はんとしてゐる。昨年，その目的に到達すべき一助として敢然『北陸女子中等学校庭球大會』を催したる我が社は，ことしまた，◇全なるが故に『生』をより長く得たる蟋蟀の鳴く音澄む十月十七日―神嘗祭の佳き日，その第二回を催す。多数同憂学校の参加を希す。
申込心得　　一校四組以内，前後衛氏名を明記して十月七日迄に本社運動課宛に申込むこと。
主催　北國新聞社

そして，この記事をうける形で，９月22日付「婦人欄」記事に第二高等女学校の庭球選手の紹介が写真入りでなされている。

庭球選手権　金澤女子運動界に活躍する人々　出場の栄誉を擔ふ人や誰　　第二高等女学校選手の巻
加納久子さん［四年］「白百合つて言つてもほんとにいい感じがしますけれどリリーつて云ひますと又特別の感じをひびかせますのね，但し私だけかもしれませんのよ」と語句のリズムの特異性を吐かれる「そしてまづ白のよりかうす～くピンクがかつたのが乙女らしくつて好き」と快活そのものの様にラケツトを一ふり…球がポーンと上にとび上つて又ちよこんと左のお手におさまる，それを小鳥をいつくしむ様にセピア色の顔にきゆとあてててにつこり微笑まれ，趣味は生花に音楽水泳もなか～～御堪能だと承はりました。
中江とめ子さん　中島八重子さん［三年］二人は仲のいい三年生です。お揃ひの運動服に照りつける陽を物ともせずポーンポーンと心よいリズムを初秋の蒼空にしみこませて激しい練習を続けてゐらつしやいます。テニスとバスケットボールが御飯よりも好きであるか無いかはちよつとききもらしましたがまさか御飯を食べないではいくら好きなテニスも出来つこはありませんわね，それからお二人は又あの修道院の尼僧のように秋を愁につつましく咲くコスモスの讃美者でいらつしやいます。

写真記事や広告から『北國新聞』の読者たちの受けとった印象やイメージを再現してみよう。

次のように広告記事を写真記事と共に示してみると，写真記事では女性をモデルにした水着ファッションが印象的に載せられ，広告では，栄養食品と医薬品のメーカー比率が相当高いことがわかる。

しかも後者については，初夏という季節柄のせいか多くが「海水浴」のイラストやキャッチコピーを添えて掲載されているのである。海水浴が健康で強い身体を育むというイメージなのか，あるいは，栄養食品で健康になった身体を海岸でおしゃれに披露しましょうというメッセージなのか，その因果はともかく，当時の健康ブームの意味の一端

を示しているといえるだろう。

①「◇今年流行の婦人向水泳着◇」（大正14年７月10日『北國新聞』）……【写真記事】①
今年は不景気のためか別段新趣向のものはない，帽子はゴム製で七十五銭位から一圓五，六十銭，水泳着の和製品は一圓位から一圓五十銭位で得られる。柄は黒や紺色や水紅色，青，紺等が普通であるが…（略）…宮市百貨店調査で，同店の女店員が写真のモデルをつとめている。

②「一渚にて一（金石にて）」（大正14年７月10日『北國新聞』）……【写真記事】②
金石海岸で撮られた女性の水着姿の写真である。記事本文はなし。

③「レートフード」平尾賛平商店（大正14年７月10日『北國新聞』）……【広告】③
海水浴に忘れてならぬ日ヤケ止メ美肌料
（解説）平尾賛平商店は，1878（明治11）年創業の化粧品メーカーである。「レート」（仏語LAIT）を商品名につけた。大阪の中山太陽堂の「クラブ化粧品」と人気を競い，「東のレート，西のクラブ」と称されたという。1954（昭和29）年廃業。

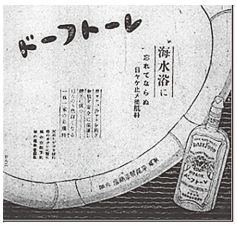
④「ラクトーゲン」乾卵食料品株式会社。（大正14年７月10日『北國新聞』）……【広告】④
「強く育てよ　白波におどるお子様は健康の天使よ」とキャッチコピーのある粉ミルク。
（解説）乾卵食料品株式会社は，1855（安政２）年，初代乾卯兵衛が大阪道修町に近江屋の屋号で漢方生薬仲買商として創業。1880（明治13）年，「和漢薬商　乾卯商店」，1917（大正６）年，「株式会社乾卯商店」，1921（大正10）年12月，食料品部が独立し乾卯食料品株式会社。このとき，育児用粉乳ラクトーゲン総発売元となる。現在，乾卯栄養化学株式会社。「母乳代用品」としての粉ミルクは，大正末から昭和にかけて製品化されている。ホシコナミルク（星製薬），ネッスルミルクフード（ネッスル），ラクトーゲン（乾卯食料品），ニッポンミルク（森永），ウサギミルク（明治製菓），パトローゲン（同），金太郎コナミルク（同），ロロン（武田長兵衛商店＝これは牛乳に加える人工栄養），人工母の乳（逸見山陽堂）など。

⑤「蜂印香竄葡萄酒」（大正14年７月10日『北國新聞』）……【広告】⑤
海の疲れに……山の憩ひに……」「シーズン来る！シーズン来る　山水を訪ひ美酒を味ひ夏の自然と静養とを恋ひ求むるのシーズンは来る！　避暑地の御慰安に―唯一の衛生飲料に―夏の健康を彌が上にも増進する蜂ブドー酒の一杯を……ゼヒ
（解説）「蜂印香竄葡萄酒」（はちじるしこうざんぶどうしゅ）は，神谷傳兵衛が1881（明治14）年に発売したワイン。「蜂印」という名称は，かつて傳兵衛が「Beehive（蜂の巣箱）」というフランス産ブランデーを扱ったことにちなみ，明治33（1900）年頃には全国で人気商品となった。現：オエノンホールディングス株式会社。「シャトー・カミヤ」のブランド名を冠している。

①【写真記事】

②【写真記事】

③【広告】



④【広告】

⑤【広告】

新聞社が，このような女性イメージを大切にし，広告記事もこれに追随するようになる背景は何だろうか。それは，新聞読者層の大衆化ともいうべき現象が生じていたからだと考えられる。

もともと女性の活字メディアとの接触の程度については，学歴や職業による差が大きかった。永嶺（1997）によれば，高等女学校を卒業後，職業婦人となったり主婦として家庭に収まったりした女性と，高女へは進学しなかった

女性との間には，２つの別個な読書文化圏を形作っていたという。

両者の文化圏が接近し，新聞や婦人雑誌がより下の階層にまでその読者層を広げていくのが大正後期以降であったのである。

5　女学校の遊園利用

粟崎遊園は，会社や工場で働く従業員の慰安の場として，それらの団体を収容し活況を呈していたのだが，では，学校との関係はどうだったのだろうか。本節では，高等女学校の遠足記録から，学校の遊園利用の実態を探ってみたい。

結論から先に述べておくと，女学校では，内灘や金石方面への遠足，海水浴は季節ごとに頻繁に実施されていたが，粟崎遊園の利用を目的とした行事は，管見の範囲ではみあたらず，せいぜい，スキー場など遊園周辺施設の利用や本館での食事利用（冬季はオフ・シーズンで休業中だったが，学校利用のために特別に開館していたものと思われる）にとどまっていたようである。

石川県立金沢第一高等女学校では，遠足や登山は，「浩然の気を養ひ堅忍剛毅の精神を練らしむ」（石川県立第一高等女学校済美會「母校施設要項」『済美』第29号，1930年，105-112頁）という目的で，おおよそ毎月１回の割合で頻繁に実施されていた。水泳と海水浴は，毎年夏休みの始めに一週間ないし十日間の期間に粟崎海岸で行われ，「身体の薄弱なるものには海水浴をなさしむ」（「母校施設要項」同書）という方針であった。

このように，昭和期の女学校では，体育や健康に関する指導にかなりの重点が置かれるようになっていた。例えば，「自覚的に体育の向上を計らしむ」ねらいのために，石川県体育協会編纂の「体育簿」が生徒各人に配布され，運動競技の事項欄に記入するとともに，毎月一回自分で身体検査を行ってその結果も記入し，体育科主任教員に提出することになっていた。また，課外活動も盛んになり，「運動部」として庭球，卓球，弓道，陸上競技，排球（バレーボール），籠球（バスケットボール），スキー部，水泳部の８部が置かれ，毎日放課後一時間程度の体操，遊戯，競技運動が行われていた。まさに，「スポーツは華やかな成績を生んだ」黄金期と回顧される時期であった。「夕日が沈んで殆ど球のゆくえもわからなくなつた校庭で手に汗を握り乍ら応援したテニス。敗けたといつては泣き，勝つたといつては泣いたが，今思うとよく涙が出たものであつた」[4]（乾満寿子（第35回卒業）の回顧。『六十周年記念　済美会誌』，1958，24頁）というとおり，女学校の校庭を彩る風景として，「気持の良いユニフォーム姿」でスポーツに汗を流す女学生，のイメージが重ねられるようになるのである。

さて，同校の1935（昭和11）年の遠足記録を一覧してみて，内灘（粟崎）方面のものがどの程度あったのかを確認してみよう。

１月10日：スキー遠足（大乗寺：金沢市長坂町）。２月５日：スキー遠足（粟ヶ崎）。３月４日：スキー遠足（大乗寺）。４月24日：遠足（伏見川・専光寺方面）。５月８日：遠足（鈴見山）。５月６日～13日：修学旅行（伊勢神宮～奈良～吉野～大阪～京都～比叡山・石山）。６月９日：修学旅行（那谷寺）。９月30日：遠足（黒壁山：金沢市別所町）。７月19日～（一週間）：「臨海生活」（粟ヶ崎海岸）[5]，７月19日～（一週間）：「林間生活」（粟ヶ崎）[6]，と盛り沢山であった 。

上記の記事にみられる夏休み中の行事（任意参加）として行われている粟崎海水浴場での海水浴は，同校の恒例行事として定着していた。校内プールでの水泳訓練とあわせて，「プールと海とで河童嬢の沢山出来ましたこと」（『済美』第33号，38頁）と微笑ましく語られている。また，粟崎でのスキーは，「雪中遠足」と「校内スキー大会」を兼ねて行われたもので，1933（昭和９）年から始められたものであった。『済美』第33号（1933）の記事には次のように記録されている。

「二月十三日　粟ヶ崎へ雪中遠足，でも往きかへり電車利用の，名のみの雪中遠足でした。そして粟ヶ崎スキー場で校内スキー大会を催しました。始めての催しなので皆珍らしく，よろこびましたが，一人病人の出たのは一寸残念でした，本館内の真赤に燃えたストーヴは此の日の上天気と共に寒さにふるへた私達にとつて最上のサービスだつたと思ひます」（同誌，32頁）。1935年の記事には，「粟ヶ崎銀盤の上を自由に元気一杯滑走される方，熱心に時々やつてくる吹雪の中をも，いとはず応援のマント隊，皆愉快な，そして楽しい少女達の雪中の光景でございました。昼食は本館にて熱い美味しいメッタ汁をいたゞき元気を回復して帰途につきました」（『済美』第35号，49頁，1935），と述べられている。

ここから，夏季における粟崎での海水浴では粟崎遊園の利用記録はなく，冬季のスキー遠足は遊園の周辺施設を利用して実施されたものであり，遊園本館は冬季閉館中であったが，本館の食堂を利用して昼食を摂る程度の利用はあったことが確認できる。

学生や女学生たちの学校単位としての利用は，スキー場やスケート場など周辺的な施設にとどまっていたようである。

6　まとめ

粟崎遊園は，北陸地方で初めてテクノロジーとエンターテイメントの要素が結びついた大衆娯楽施設であった。それは，伝統的な「遊楽」の空間ではなく，子どもから若者，

婦人まで含んだ幅広い層の人々がアクセス可能な余暇空間として構想され，実際にその思惑どおり大きな賑わいをみせたのであった。この施設は，平澤嘉太郎という一事業者が小林一三の宝塚をモデルとして事業化されたものであったとしても，地元新聞社による熱心な時事記事や保健・医薬関係の広告が掲載され，また，自社の率先した社員旅行企画の記事などの無意図的な宣伝効果も含めて，相乗的に人々の関心を集めるところとなった。

また，この余暇空間が社会的に人々の受け入れるところとなった理由として，競技スポーツの大衆化と軌を一にしている点があげられよう。すなわち，競技スポーツは，競技場やグラウンドのような場所があることによって，ひとつの風景として受容されてきたのと同様に，粟崎遊園のようなレジャー施設も，学校や工場の空間からは排除されてしまうような雑然とした身体を，その衛生的で規格化された環境によって取り込み，各施設に配分し管理することで無害化する空間であったからこそ受容されていった側面があると考えられるのである。新聞メディアのような道徳性を伴った言説にも耐え，広く人々の支持を得ることの出来る健全な娯楽施設として定着していく理由はこういうところにもあるように思われる。

粟崎遊園は，工場で働く職工たちの慰安旅行として大口の利用があったり，小学校の修学旅行で「コドモの国」の利用があった記録があったりしたが，他方で，この新しい管理された余暇空間は学生や女学生の出入りする空間としては不向きであったことも示唆された。それが一体どのような論理と心理によるものであったのか，大衆の新しい余暇空間の編成と身体管理の関係の検討は，今後この観点からもなされなくてはならないだろう。

注

（１）粟崎遊園の開業の３ヶ月後（1925年10月20日）に金石海岸の浜に「涛々園」が開業している。金石電気鉄道の直営事業として料理業兼貸席の設備を有するなど，粟崎遊園に対抗して賑わいをみせていた。1947（昭和22）年に「涛々園前駅」が廃止された。

（２）例えば，『中央新聞』は，早くも大正２年，「大阪の郊外電車（一～十）」と題した連載において，大阪の私鉄（郊外電車）の経営方針を批判しているように（『中央新聞』1913. 9. 15-1913. 9. 25；大正２年記事）。「大阪市民は全く彼等電鉄会社より遊ぶべく金を使うべく間断なき包囲攻撃を受けつつあるなり海に来れ山に遊べ汐湯に入れ動物園を見よ住宅を造れ別荘を設けよと之れ彼等電鉄会社が大阪市民の乗車を強いつつある誘引の好餌なり」。また，大正14年でも，『 東京朝日新聞』が「鉄道と軌道～副業の生む利益～」と題した次のような記事を載せている。「宝塚の少女歌劇は知っていてもそれが阪急電鉄の副業だと知っている人は少ない様だ。・・（中略）・・又遊覧設備で客を呼ぼうと云う派手なやり方もある。詰り遊園地，運動場，温泉，旅館から時節柄海水浴場の経営までやっている会社がざらにある」（1925（大正14）年８月25日）。

（３）東京・豊島園（1926（大正15）９月15日開業）の場合，催し物の多くが，客寄せ的な見世物の域を脱せず，宝塚のような「文化」を形成するには至らなかったと吉見（1990）は指摘している。

（４）明治期の第一高女の回顧と比較すれば興味深い。「私共が女学校に入つた頃は未だ日露戦争が始まらない前，石川県に県立女学校が始めて出来た當座でした，女の子が袴をはいて学校へ行く，英語の本をよむ，なわ飛びをする，そんな事は大かたの年寄達には気に入らなかつた様です，二言目には女の子がと言ひ～～されました。」（酒井十代（第５回卒業）の回顧。『済美』第27号，1928，98頁）。

（５）昭和8年の記事では，「年毎に参加者の著しい増加を見」るようになり，また同年から校内の中庭にプールが竣工したこともあり「待ちかねてゐた人魚たちの，白い飛沫に健康な四肢を踊らせて楽しげに泳ぎ廻る姿」が見られるようになったことが載せられている。

（６）白山登山が行われるのも恒例となっていた。これは，２泊３日の日程で，石川県側登山口である白山温泉から，飯場，弥陀原，そして室堂へと辿るコースであった。1930（昭和５）年の同登山の場合，引率教員５名に本科生・研究科生の有志23名が参加して実施されたが，このうち17名が頂上まで登っている。

参考文献

竹村民郎，1996，『笑楽の系譜』同文館。

鹿島茂，1999，「遊園地の誕生と日本近代」青木保他編『近代日本文化論７　大衆文化とマスメディア』岩波書店。

吉見俊哉編，1996，『都市の空間　都市の身体（21世紀の都市社会学）』頸草書房。

吉見俊哉，1990，「大正期におけるメディア・イベントの形成と中産階級のユートピアとしての郊外」『東京大学新聞研究所紀要』（41），p141-152，東京大学新聞研究所。

阪急沿線都市研究会編，1994，『ライフスタイルと都市文化』東方出版。

橋爪紳也，2007，『京阪神モダン生活』創元社。

竹之下休蔵,岸野雄三，1983，『近代日本学校体育史』日本図書センター。

木下秀明，1970，『スポーツの近代日本史』杏林書院。

小坂美保，2003，「近代日本における都市と身体に関する研究序説--明治・大正期の公園を手がかりに」

『スポーツ社会学研究』11, 62-74，日本スポーツ社会学会。

瀬崎圭二，2010，「海辺と＜肉体＞―大正期の身体表象について―」『広島大学大学院文学研究科論集』第70巻，49-75。

永嶺重敏，1997，『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部。